

KEY わーど

第70回

「文楽ゆかりの地マップ」でまちあるき

団七と義平次の事件現場はいずこ？



ゴンゴンヂキデン、ゴンヂキデン…祭り囃子が市内各所で聞こえる暑い夏が来た。

大阪の夏芝居といえば「夏祭浪花鑑」だ。延享2(1745)年、実際の殺人事件をモチーフに、並木千柳・三好松洛・竹田小出雲が脚本を書き、道頓堀の竹本座で初演された。人形浄瑠璃のみならず歌舞伎でも人気狂言となり、有名な七段目「長町裏」では、高津宮の祭礼の地車が響くなか、遊女の琴浦を駕籠で連れ出した舅の義平次を、主人公の団七が泥田に足をとられながら殺害する。6月の国立文楽劇場「社会人のための文楽入門」でも上演された。

印象深いのが、扇町公園の仮設の芝居小屋で十八代目中村勘三郎(当時は勘九郎)が演じた「平成中村座」の熱気溢れる「夏祭」である。「平成中村座」はニューヨークでも公演し、凱旋記念公演を大阪松竹座で行った。また、2013年の大阪松竹座「十月花形歌舞伎」では、片岡愛之助が、御神輿をかつぐ役に現代の高津宮の氏子を参加させ、私もこのとき舞台を踏ませていただいた。

さて、世界に誇るユネスコの無形文化遺産である文楽を親しんでもらうために、大阪市は、河内厚郎さんを中心に「文楽ゆかりの地マップ」を作成した。市のホームページからダウンロードでき、文楽座や竹本義太夫、曽根崎心中ゆかりの場所をめぐる街歩きコースも設けられている。

(<http://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000347743.html>)

私もマップ作成に加わったが、場所の特定が難しく、「長町裏」の泥田を地図のどこに書き加えるかも問題だった。郷土研究『上方』夏祭号では、現在の千日前の南側、当時は関谷口とよばれた付近を口伝としてあげ、義平次殺しの泥田もこの付近とする。「長町」は、現在の日本橋以南の堺筋の呼び方で、通りの裏の地域を「長町裏」と呼んだが、私には少し疑問があった。

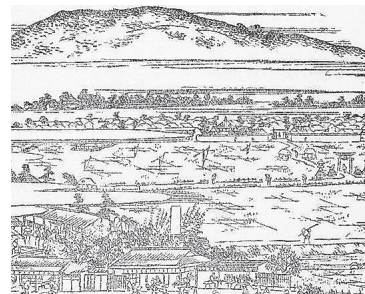
義平次が琴浦をかどわかしたのは、祭囃子が聞こえるほど高津宮に近い侠客・釣船三婦の家からで、現在の中央区高津か瓦屋町付近だろう。浄瑠

璃は、宵闇にまぎれた義平次の逃走を「神と仏を荷ひ物、囃し立てたる下寺町、高津宵宮の賑ひに紛れて急ぐ舅義平次」とかたるので、下寺町付近を南へ逃げたことになる。そして団七は「長町裏」で義平次に追いついた。その現場を、『上方』夏祭号がいう千日前の南側、堺筋の西側とすると、「下寺町」と離れてしまうし、駕籠が人通りの多い堺筋を横断する必要があり、人目につきやすい危険なルートをあえてとるか疑問だった。

この問題に引っかかっていたら、^{あかつきかみゆり} 眺鐘成「摂津名所図会大成」(『浪速叢書』第8巻)に「長町裏」が描かれていた。生駒の山並みを背景に上町台地を経て、手前が「長町裏」で、田んぼに「夏祭浪花鑑」にも出てくる撥ねつるべ式の井戸がたくさん描かれている。ここはどこか? 画面真ん中の鳥居のむこうにあるお堂が、現在も高島屋東別館の西向かいにある毘沙門堂(大乘坊)ならば、風景は堺筋西側となつて、『上方』夏祭号の説に近い。

しかし、堺筋の東側もこうした風景が広がっていたと思われるし、高津宮の御神輿が氏地を越えて来たかの疑問も残る。ついでに言うとう「文楽ゆかりの地マップ」では、団七は「八丁目さして落ちていく」ので、一丁北側の長町七丁目付近を事件現場と考えたが、団七が、泥田から紀州街道である長町へ逃走を図ったという読み方もあるかも知れない。

「文楽ゆかりの地マップ」では、堺筋西側の可能性も含みつつ、「下寺町」という言葉から堺筋の東側に幅広く印を付けた。実際の事件と創作である戯曲は別モノと言えその通りだが、細部にこだわるのが文楽から歌舞伎、落語にも通じる“大阪のリアリズム”だっせ、と新国劇の殺陣師段平のような思いで地図を検討したが、まだまだ今後も新しい説が唱えられるだろうし、それもまた嬉しい。



眺鐘成「摂津名所図会大成」より「長町裏」の部分

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像一』(創元社)など。